

# R

KANSAI  
UNIVERSITY  
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

# reed

No. 9

November, 2006

関西大学ニュースレター  
発行日：2006年(平成18年)11月30日  
発行：関西大学 総合企画室広報課  
大阪府吹田市山手町3-3-35  
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121  
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



■鼎談

冬柴 鐵三 (国土交通大臣) × 森本 靖一郎 (理事長) × 河田 悌一 (学長)

## 創立120周年、そして新たな挑戦 「原石を磨き輝かせるのは教育の力だ」 —1

■リーダーズ・ナウ —5

在学生 — 社会学部 3 年次生 ・ 大竹 弘晃さん

卒業生 — 大阪弁護士会 会長

小寺 一矢さん

■研究最前線

授業支援型 e-Learning システムによる理工系 ESP 教育

進化する専門英語教育 ESP —7

外国語教育研究機構 — 山本 英一 教授

超高密度化・大容量化されたハードディスクの実現へ

ナノテクによる高密度・垂直磁気記録 —9

工学部 機械工学科 — 新宮原 正三 教授

■トピックス [学内情報]

関西大学 創立 120 周年 —11

記念式典・祝賀会を開催

「学の実化」の歴史と伝統を継承 ほか

■連携事業 / 産学連携

光弾性定数測定装置を開発

液晶ディスプレイの高精細化を推進 —13

工学部 物性物理学研究室 — 田貫 佳郎 教授

■連携事業 / 地域連携

日本初「カレッジリンク型シニア住宅」

創設記念シンポジウム開催 —14

■関大ニュース —15

明日香村で

「網干先生を偲ぶ会」ほか





■鼎談



冬柴鐵三(ふゆしば てつぞう)  
1936年中国(旧奉天)生まれ。60年関西大学法学部法律学科卒業。61年司法試験合格、64年御堂筋法律事務所開業。86年旧兵庫2区から公明党公認で衆議院議員に初当選、以来7期連続当選。決算委員長、自治政務次官を務める。98年11月から2006年9月まで公明党幹事長。06年9月国土交通大臣に就任。関西大学校友会尼崎支部顧問。

◆貧困に負けない「強い男になる」ために

**森本** 今日は大臣と膝を交えてお話し合いができることに、心より感謝しております。強い関西大学を宣言して着々と成果を上げているさなかに、創立120周年の節目を迎えることができました。母校の「現在」をご覧になって、率直なご感想からお聞かせください。

**冬柴** 太陽が一周して、また日が昇るというような印象です。120年という時を刻んで、今また日が煌々と輝いているように感じます。学長も頑張っているし、それを法人として理事長が支えておられる。関西大学の近年の飛躍には華々しい力を感じます。

**河田** ありがとうございます。かなり長い間、低調だったスポーツもようやく強くなってきて、最近是在学生のみならず、卒業生の関西大学に対する帰属意識がより強くなった気がしています。

**冬柴** 同感です。私はずっと関西大学二部(夜間部)卒業ということに誇りを持ってきました。どこへ行っても、私が今あるのは関西大学のお陰と公言しています。私が入学したのは昭和31年4月。建学120年のうち50年を、関西大学と共にあるわけで、関西大学は私にとって人生そのものと言ってもいいくらいです。

**森本** 大臣は、つらい引き揚げ体験をお持ちだと伺っています。そういう方が関西大学に学び、弁護士を志されたことを、関大人として誇りに思います。

**冬柴** 私は旧南満州鉄道の技師を父に持ち、中国の奉天で生まれました。終戦時に家族4人、猛爆の中の逃避行を余儀なくされ、両親と姉からはぐれてしまいました。わずか9歳ですから、不安で恐ろしくて、母や姉の名を呼び、泣き叫びながら走りま

した。幸運にも20日後に家族と再会できたのですが、母は心労のあまり衰弱し、間もなく亡くなりました。「戦争ほど残酷なものはない」と、心に深く刻みつけた思い出です。

日本に引き揚げてからは、まさに赤貧の少年時代でした。国全体が貧しかった時代ですが、食べるものにも困る状態で、三重県の中学を卒業する時、将来は何としても「強い男になりたい」と考えたのです。子ども心に、強い男すなわち商売人と思い、家出同然で大阪に出てきました。商売なら大阪だというわけです。大阪市立扇町第二商業高等学校を卒業後、商売には法律が役立つに違いないと考え、関西大学二部法学部に入学しました。

◆司法試験合格を目指し、ひたすら学んだ日々

**冬柴** 弁護士になろうと決めたのは3年生になる前のころで、やはり貧しい庶民の味方になりたいという信念からでした。天六学舎の司法試験研究室の末席に座らせていただき、試験勉強を始めました。22歳で高校の同窓生と結婚してからは、女房に家事を任せて勉強に集中しました。仕事を終わると急いで通学し、帰宅するとひと眠りして、女房に朝1時に起こしてもらって6時までの5時間、猛勉強して朝方1時間ほど布団にぐるぐるしてから出勤しました。こうして卒業翌年の昭和36年に、司法試験に合格しました。

**河田** 関西大学には苦学して卒業され、そのご苦労をバネにして成功された方が大変多いのですが、大臣はどのような学生でしたか。

**冬柴** 自分で言うのもおかしいのですが、かなりの優等生だったんです(笑)。仕事が終わったら走って大学に行き、友人5〜6人で教壇の前の席を独占するんです。熱心に授業を聴き、全部ノートに取りました。国際法の川上敬逸教授は非常に厳しく、「1年や2年で国際法が分かるわけがない」とおっしゃり、単位を落とす先生として知られていましたね。ある時ノートを提出すると言われたことがあって、みんな大パニック。同級生たちは私のノートを借りに来て、あわてて写していました。私は司法試験を受けると決めてからも、試験に関係のない教養科目も結構勉強しましたね。成績は良かったので、卒業式では総代を務めました。

**森本** 仕事や試験勉強で忙しかったはずなのに、首席で卒業とは驚きます。当時の天六学舎は、夢を持つ学生が集まっている学び舎でしたね。

**冬柴** 周辺の街も、関大の気風そのものでした。庶民的で、近くに飲み屋さんもありました。当時、地下鉄工事をやっていた、夜中も真っ黒になって働いている方が大勢おられましたね。夜遅く大学から下宿に帰る道すがら、ああ、みんな頑張っている、僕もやってやるぞと気持ちが奮い立ったものです。

日本の国がおかしいと思うのは、これだけ地震や津波、台風などの天災が多いのに、危機管理に対応できる人材を育成する国の制度がない点です。



森本靖一郎(もりもと せいいちろう)  
1932年奈良県生まれ。関西大学文学部、法学部卒業。母校に奉職し、67年に関西大学教育後援会幹事長に就任。「大学と家庭のかけ橋」をモットーに、大学と父母間に信頼の絆を作り上げた。飛鳥文化研究所の開設にも尽力。事業局長、常務理事を経て、2000年専務理事、04年10月理事長に就任。「強い関西大学」を提唱している。

◆過去回顧的な仕事から将来展望的な仕事へ

**森本** 大臣は最初から青雲の志を抱いて政治家になられたのではなく、弁護士から転身されました。何かきっかけがあったのでしょうか。

**冬柴** 私は友達と日本一の弁護士事務所をつくろうと決意して、最初6人で大阪に共同事務所を開きました。今は弁護士が42人になっています。事務職の方も入れると約100人、東京の霞が関ビルにも100坪の事務所を出しました。私はその事務所と終身契約を結んでおり、生涯弁護士を続けるつもりでした。

ところが49歳の時に、公明党から出馬要請がありました。私がある時に考えたのは、弁護士は、いわば過去回顧的な仕事だということ。過去に起こった事件を法廷で再現して、社会正義を実現する。しかし、政治家は将来展望的な仕事です。目的はどちらも一緒で、基本的人権を擁護し、社会正義を実現すること。49歳まで過去回顧的にやってきたのなら、残りの人生は将来展望的な仕事に懸けてみようかと決断しました。何より、赤貧の中で育ちましたから、弱い立場の人を擁護するには、政治による社会変革が必要だと感じたのです。

# 創立120周年、そして新たな挑戦

## 「原石を磨き輝かせるのは教育の力だ」

冬柴 鐵三 ◆国土交通大臣  
森本 靖一郎 ◆理事長  
河田 悌一 ◆学長

2006年11月4日、関西大学は創立120周年を迎えました。記念式典で祝辞を述べられた冬柴鐵三・国土交通大臣をゲストにお迎えして、新たな一歩を踏み出した関西大学の伝統と未来像を語り合いました。貧しかった少年時代、充実した学びの時を持ち得た関西大学の学生時代を振り返りながら、政治家としての使命を熱く語る大臣。関西大学の過去と未来をつなぐ鼎談をお届けします。





河田 梯一(かわた ていいち)  
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。財団法人大学基準協会理事。

来春創設の新学部でも、命や環境の視点からものを考えられる人、また地方、国、世界のために政策立案できる人を育てていきたいと思っています。

旧兵庫2区は、旧社会党の土井たか子さんら強豪の中での選挙で、関西大学校友会の力は大きかったですね。7回挑戦して、いつも真っ先に代々の理事長に来ていただき、「関大党」の冬柴をよろしく」と応援していただきました。関大には本当に感謝しています。

河田 OB・OGの活躍は、私たち関西大学の名誉でもあります。ところで、弁護士としてのさまざまな経験が現在、政治家としての活動に役立っていることもおありになるのでしょうか。

冬柴 たくさんあります。例えば、つい最近まで法律相談、市民相談などには国費が出ていなかったんですよ。弁護士になった時、私は、貧困な人にとって弁護士の数居が非常に高いことが気になりました。裁判をする権利は憲法ですべての人に保障されているはずなのに、裁判費用の扶助制度がなければ、庶民は弁護士を雇うことも、裁判もできません。国がどうしてやらないのかという義憤もあり、初当選した時(昭和61年7月)、真っ先に法律を作ろうと動きました。国の補助金で弁護士が付くリーガルサービスの制度を、翌年の憲法記念日に発表しました。

お金がかかりますから随分反発が大きかったんですが、あきらめずに法務委員会で16回、予算委員会で7回、質問に立ちました。この制度の先進国であるイギリスにも、今、大阪弁護

士の会長になっている関大OBの小寺一矢さんと一緒に視察に行きました。彼は私が質問するたびに傍聴してくれました。こうして「民事法律扶助法」が成立し、法律扶助制度が整いました。それを引き継いで、この10月に私の念願だった日本司法支援センター(法テラス)が稼働を始めました。やっとここまでできたという感慨がありますね。

### ◆未来へ向かって、改革を断行する関西大学

森本 お話を伺って、困っている人や貧しい人を助けたいという、若いころからの一貫した志を感じました。このたびは国土交通大臣という要職に就かれましたが、どのような方針で臨まれますか。

冬柴 日本は天災が多い国ですから、災害を最小限に抑えるために、何をなすべきか考え、取り組んでいます。また、日本は少子高齢化社会で、人口減少期に入りました。当然、消費は収縮しますから、日本の狭い国土の中だけでは活力が失われます。そこで私は、技術の開発は日本で行い、生産拠点や販売拠点は中国大陸をはじめとする東南アジア、世界に広げるべきだと考えています。日本は四方が海ですから、ものを運ぶにしても、人が行き来するにしても海を越えなければなりません。まず国際港湾を整備して、生産拠点と結ぶネットワーク、例えば高速道路や新幹線なども整備し、国際競争力を高めること。それが21世紀の日本を豊かにすることになります。

もう一つは、地方の問題です。いま三大都市圏と地方との格差が取り沙汰されていますが、頑張る地方を応援したい。例えば、今まで道路予算は国が配分を決めていましたが、地方に主体的に決めていただく方向にする。真に必要なとされる公共投資とは何かを重点的かつ効率的に見極めて、必要ならば断行するという方針です。

森本 そのお考えに大賛成です。国と大学では規模が違いますが、私は理事長就任に際して「強い関西大学」をつくと宣言し、学長とスクラムを組んで改革を断行し、少子高齢化対策にも取り組んでいます。

例えば、日本初の「カレッジリンク型シニア住宅」の創設。アメリカでは既に始まっているのですが、シニア住宅で、入居者を対象に大学の講座を開講したり、入居者の方に学生と一緒に大学の授業を受けていただく制度です。まずは本学の文学部と神戸のシニア住宅とが提携し、08年からスタートする予定です。キャンパスが率先して「知」のネットワーク、つまり「知縁コミュニティ」を形成し、少子高齢化社会に貢献します。

また、高槻駅前の新キャンパスで「危機管理士」のようなライセンスが取れる仕組みを立ち上げたいと思っています。日本の国がおかしいと思うのは、これだけ地震や津波、台風などの天災が多いのに、危機管理に対応できる人材を育成する国の制度がない点です。弁護士や公認会計士などと同じように、「危機管理士」といった国家資格制度が必要だと思います。

冬柴 それは斬新な発想ですね。政府としても、ぜひ前向きに検討させていただきます。

河田 関西大学では、他大学に先駆けて「安心・安全のための大学」というものを考えています。高槻市は安心・安全の都市づくりを目指していますから、共同でやっつこうという話です。だから、OBが国土交通大臣に就任されたことも、心強く感じています。

### ◆発展と改革の根底にある建学の精神「学の実化」

河田 大臣が卒業証書を受け取られた、当時の岩崎卯一学長は、敗戦後まもない昭和22年5月、「学生諸君に告ぐ」という文章を大学新聞に寄せています。その中で「関大ルネッサンス」という言葉を使って、大学改革を呼びかけておられるのです。私はその言葉を借りて、21世紀という新しい知の時代の要請に応える大学改革を呼びかけています。いわば「関大ルネッサンスをもう一度」というわけです。

前述の少子高齢化対策のほか、工学部の再編、新学部の創設などに取り組んでいます。現在の工学部11学科は来年度から、「システム理工学部」「環境都市工学部」「化学生命工学部」の3学部9学科にダイナミックに再編します。また、実践的な政策立案力を養う「政策創造学部」を千里山キャンパスに新設します。

これらの改革の根底にあるのは、建学の精神である「学の実化」です。大阪には庶民の文化が開き、江戸幕府の朱子学的な官僚の学問ではなく、京都の公家や僧侶の学問とも異なる、合理的にして社会に有用な庶民の学問の伝統があります。貧民救済を唱えた大塩平八郎が学んだ陽明学に由来する「知行合一」の精神が、「学の実化」にも受け継がれていると思います。来春創設の新学部でも、命や環境の視点からもの考えられる人、また地方、国、世界のために政策立案できる人を育てていきたいと思っています。

森本 私は、同じく岩崎卯一先生の「関大一家」という言葉に共感し、その思想を「子どもの母校はわが母校」として引き継いで、父母の組織「教育後援会」を作りました。さらに、卒業生・父母の同窓会と称して「千寿会」を作りました。大学生、大学生の父母、卒業生の親たちも、みんな「関大一家」というわけです(笑)。

河田 その、いわゆる「関大一家」には、最高齢91歳で社会貢献をなさっている遊上義一さんという方もおられます。一生、関大を支えてくださっています。

冬柴 関大OB・OGは本当に各界で活躍しています。地方公務員にも多く、あちこちの市役所に職域会がありますからね。

森本 関大OB・OGは、国会議員として8名がおられます。そして、大阪府下では池田市、茨木市、摂津市、守口市の市長や大阪府議会議長など府議会議員、市議員など多数、さらに大阪府・大阪市には3~4,000名もの校友職員がおられます。また、兵庫県下では淡路市、小野市、加古川市、神戸市の市長をはじめ、県の役職者や議員にも校友がたくさんいらっしゃいます。実業界では大坪文雄松下電器産業社長、吉野伊佐吉本興業社長、南部靖之パナソニック代表、中谷修己きんでん社長など、社長も大変な数に上ります。



河田 スポーツでも強さを発揮してくれています。フィギュアスケートの高橋大輔君と織田信成君は、多くの世界大会でトップを競っています。今年7月、高槻市に開設した関西大学アイスアリーナは、日本の大学で初めての国際競技規格のアイススケートリンクです。

森本 オープニングセレモニーでは、本学の高橋大輔君、織田信成君、平井絵己さんをはじめ、招待選手の村主章枝さん、安藤美姫さん、中野友加里さんらトップスケーターによるエキシビジョンが華々しく行われました。スケートリンクは大変な費用がかかるというので反対が多かったんですが、信念で取り組めば、道は開けるものです。

冬柴 アイスアリーナのオープニングセレモニーには私も出席し、小泉首相の親書を讀ませていただきました。

森本 本学会計専門職大学院の宮本勝浩教授の試算によると、アイスアリーナのPR効果は多大で、近畿経済への経済波及効果は16億6,552万円に上るとのことで、澤田亜紀さん、北村明子さん、金彩華さんという高校3年の有望女子3選手も、こぞって本学に入学することになっています。

### ◆人は皆、ダイヤモンドの原石。夢の持てる教育を!

河田 性善説を唱えた孟子は、物事を成し遂げる場合に重要な要素として、天の時、地の利、人の和という3つのものが必要だと言っています。と同時に、成功するには人の和を得ることが何より大切で重要だと。このたびの120周年は、天の時があり、大阪という地の利があり、さらにまた、たくさんの人の和により、実現したものだと思心から感謝しています。

冬柴 まさに「関大党」の力が結集されたわけですね。

森本 さらに、JR高槻の駅前で、幼児教育から初等・中等・高等教育、そして生涯教育までの一貫教育を実現させます。

また、関西大学を卒業した人を対象に、生涯にわたる就業支援を始めました。国籍は変えることができても、母校は変えることができません。生涯、固い絆で結ばれているのです。創立120年の記念すべきこの日に、さらに強い関西大学を目指して「関西大学から世界へ」を宣言いたします。そして、卒業生は世界へと羽ばたいていきます。

冬柴 人は皆、ダイヤモンドの原石です。原石のまま埋もれさせてしまうのではなく、それを磨くのが教育の力です。もちろん、本人の精神力がなければ磨くことはできませんが…。私は貧しかったけれど、学問する中で一度も将来に不安を持ったことがなかったんですね。食べ盛りの高校時代に一日2食しか食べられませんでしたし、電車賃がないから、よく歩きました。でも、心は希望に燃えていました。今の時代に、どうか夢の持てる教育をお願いします。

森本 はい。大臣のご協力もいただきながら、世界の人々が幸せを感じられる社会づくりに貢献します。今日はありがとうございました。



■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

## 世話すると 馬は応えてくれる

国際大会で総合馬術団体3位！  
「常に馬の管理。一番楽しいのは試合」

●社会学部3年次生 大竹 弘晃 さん



フランスのラ・ロシェルで6月に開催された第7回世界大学馬術選手権大会に出場した体育会馬術部の大竹弘晃さんが、総合馬術団体3位に入賞しました。大竹さんは昨年の全日本学生馬術競技大会(第55回全日本学生賞典障害飛越競技大会)でも、団体と個人で2位の成績でした。馬術部の馬場・厩舎が千里山キャンパスから高槻キャンパスに移って2年がたちました。恵まれた環境の中で、部員は20頭の馬の世話をしながら、馬術競技の頂点を目指しています。

大竹弘晃—おおたけ ひろあき  
■1986年大阪府生まれ。岡山理科大学附属高校卒業。  
社会学部3年次生、第1部体育会馬術部所属。

大竹さんら日本選手は、ドイツのプレーメンで合宿してからフランスの大会に臨み、総合馬術団体3位を達成しました。大竹さんにとって海外の試合は初めて。「日本の試合はかなりピリピリした感じがするのですが、外国の選手は気軽に話しかけてくれて、観客も選手も楽しんでいるのが分かり、雰囲気の違いを感じました」

団体の順位は、3人の成績のトータルで決まります。他の2人は明治大学の学生でした。関西大学が2位を占めた昨年の全日本学生馬術競技大会も、優勝したのは明治大学。関大馬術部の面々は、高槻キャンパスの馬場で練習し、打倒明治を目指しています。

馬術競技は障害飛越競技のほか、規定の経路で騎手の技量と調教レベルを競う馬場馬術競技、その2つにクロスカントリーが加わった総合馬術競技があります。

大竹さんが乗馬を始めたのは小学校2年生のころ、観光地で馬に乗ったのがきっかけ。「もっと乗りたい」と言ったことから、地元の乗馬クラブに通うことになりました。中学生になり、試合に出るようになってからは、自ら意識して取り組むようになったそうです。乗馬クラブの場合は個人の成績ですが、大学では団体競技があるので、メンバー全員、チーム全体で盛り上がる雰囲気が楽しいと言います。

部員は毎朝7時半に集合。それぞれ自分の乗っている担当馬をしっかりと世話しています。大竹さんの馬は14歳の「千嵐」。千嵐の名は、代々受け継がれてきました。



「馬は生き物なので、放っておくことはできません。けがもするし病気もする。試合に連れていくのも気を使います。実際に走るのには馬ですから。でも、そのコンディションを作るのは人間です。常に気をつけていることは、馬の管理です。ひたすら障害を飛んでいけばよいというわけではなく、上手に休ませてやらなければ。馬にも心があるので、馬が気を悪くするようなことはできません」

良い意味でマイペースで、試合前でもあまりピリピリしないという大竹さんに、馬術の魅力、面白さを聞きました。

「相手は生き物で、自分も生き物だから、こうすれば絶対勝てるというのはありません。どんなに有名でどんなに実績のある馬でも、絶対勝てるとは限らない。勝てると思っていても負けることもあるし、逆に優勝候補でもなんでもない馬が勝ったりして、不確定なところがむしろ面白いですね。かといって偶然ではなくて、何らかの裏付けがあって勝てるわけです」

大竹さんの目標は、全日本学生馬術競技大会の団体と個人で優勝すること。今、一番楽しいと感じる時を聞くと、「試合ですかね。緊張もするけれど充実しています」。頼もしい答えが返ってきました。そこで、上達の秘けつは――。

「練習することと考えることだと思います。同じ馬でも、時間とともに様子が変わってきます。年を取れば体力的に落ちてくることもあるし、若い馬だと元気すぎることもある。馬の管理を一日中考えていると計画性が身につきます。心をこめて世話すると、ちゃんと応えてくれますよ」

## 法律を 分かりやすい言葉で

法律の専門家の難しい言葉に反発  
「関西大学法律相談所が学びの場だった」

●大阪弁護士会 会長  
小寺 一矢 さん—法学部 1964年卒業—

今年4月に大阪弁護士会会長に就任した小寺一矢さん。法律を通じた地域社会とのかかわりは、関西大学在学中の「法律相談所」の活動に始まります。小寺さんは、関西大学法律相談所が1962年に千里山法律学会から独立した時のメンバーです。「相談に来られる当事者の方々と一緒に悩みながら勉強させてもらいました」。折しも、法的な問題で困っている市民を支援する「法テラス」(日本司法支援センター)がスタートした10月2日、大阪弁護士会館を訪ね、小寺さんに話を伺いました。

小寺 一矢—こてら かずや  
■1941年、大阪府生まれ。64年、関西大学法学部卒業。67年、同大学院修士課程(私法学専攻)修了。71年から弁護士。2006年4月、第126代大阪弁護士会会長に就任。



「弁護士になって以来、この職に就いたことを悔やんだことは一度もありません。まさに天職だと思っています」。小寺さんは祖父も父親も医者という家に育ちましたが、「弁護士は依頼された仕事を通して自分の生きざまを表現できる」と言います。それだからこそ、「絶対に自己の利を求めることがあってはならない、それを目的に生きる人はこの仕事に就いてはいけません」。

小寺さんにとって弁護士業の原点である関西大学法律相談所は、現在も無料で法律相談や地方での夏期移動法律相談を行っています。62年当時、公法中心の勉強会が多かった千里山法律学会(千法会)に対して、民事を学びたい学生が集まって「独立運動」を展開。千法会の会長であり、法律相談所の所長であった中谷敬寿学長に相談もせず、勝手に民事系の先生に顧問を頼みに行ったことから、学長室に呼び出されてしかられたことも。「中谷先生は一学生を相手に真剣にしかられました。先生からは社会人として生きていく上での厳しさを教えてもらいました」

天六学舎で土曜日の午後に法律相談所を開き、教室で学べない多くのことを経験した一方で、学生責任者として組織づくりや先生方との交渉に力を入れるあまり、肝心の法律の勉強が遅れてしまったと苦笑い。しかし、持ち前の「なにくそ精神」でやってきたという小寺さんは、「そのようなことができるのが学生の特権であり、青臭くても議論をどンドンしてほしい。そ



のためには本を読み、専門以外の勉強もしっかりやらなければ」と若者にエールを送ります。

「法律の専門家は、やたらと難しい言葉を使いたがります。それが私は大嫌い、若いころから反発を感じました。関大時代も、普通の日本語で言ってもらえませんかと言いたい授業が少なくなかったですね。なぜもっと平易に言えないのでしょうか。法律は国民のものであり、普通の国民が聞いて理解できないような言葉を専門家同士が隠語みたいに話して、いかにも偉いんだと錯覚している。私が20年間ほどテレビに出演してきたのは、法律について分かりやすい言葉で伝えよう、こけおどしはやめようという思いからです。法律とは、人間と人間が生きていく上で必要なルールですから、本来分かりやすければルールにならないはず。それを専門家が読み解かなければならないのは、実におかしいのです」

ガラス張りの大阪弁護士会の新会館は、9月4日にオープンしました。会員が3,000人を超え、10年後には5,000人の規模になるそうです。弁護士が今後、さまざまな分野に進出し、業務を広げていく基盤にこの会館を使うとともに、府民、市民が利用しやすく、生活になじむ会館にしていきたいと、小寺さんは将来を見据えつつ、後輩にも期待しています。

「それぞれの事件は、弁護士にとっては日常的に数ある中の一つでも、その人にとっては一生に一度あるかないかの大事なことなんです。一人ずつ顔が違うように、その一つ一つが大切なんだということを、若い連中にいつも言っています」



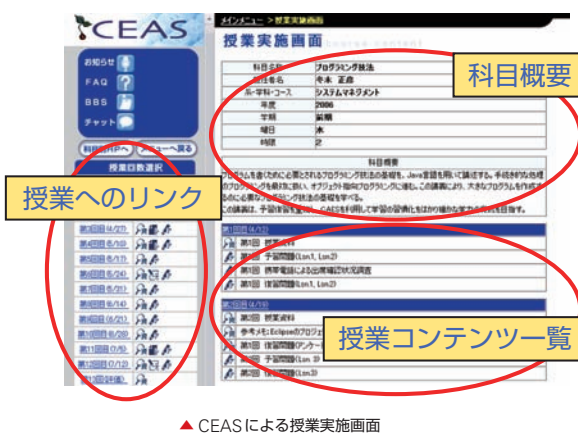
研究最前線

授業支援型 e-Learning システムによる理工系 ESP 教育

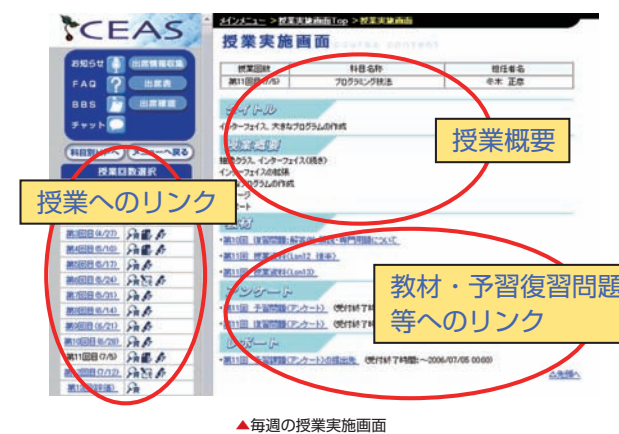
# 進化する ESP

English for Specific Purposes

e-Learning を窓口に、工学部の専門教育と語学教育を連動



▲ CEAS による授業実施画面



▲ 毎週の授業実施画面

CEAS を用いた ESP テスト



● 外国語教育研究機構  
山本 英一 教授 (副機構長)

e-Learning システム CEAS (シーズ) を用いて、工学部と外国語教育研究機構のコラボレーションによる専門英語教育 (ESP) の試みが始まっています。このシステムは、文部科学省の平成 16 年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代 GP)」に採択されたもので、実用性に優れています。CEAS を利用した外国語学習の実践について、その狙い、成果や可能性などを山本英一教授に聞きました。

外国語学習にマッチしている CEAS

《授業支援型 e-Learning システム CEAS は、現代 GP に採択された関西大学のプロジェクト「進化する e-Learning の展開—授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化—」の一環として行われてきました。外国語教育に携わる立場から、CEAS のどこに注目されたのですか》

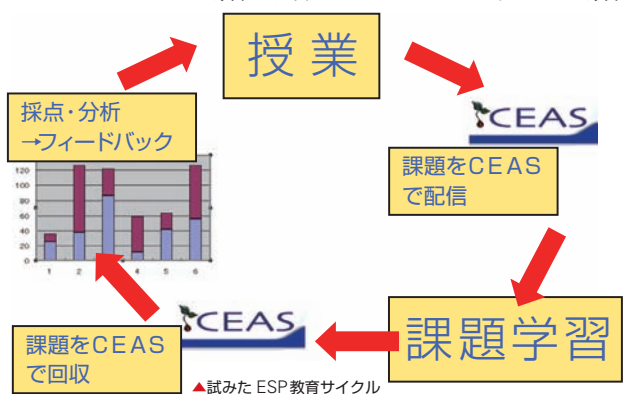
インターネットを用いた学習だけを目的とした一般的な e-Learning と異なり、CEAS は授業支援型です。教室の中での授業が終わってから、自宅あるいは学内のパソコンで、さらに学習を深めることを狙っています。関西大学の場合、外国語教育は 1 つの語学について 1 回 90 分の授業を週 2 回、これを 2 年間行うのが一般的です。ところが、平均的な学生が社会に出て、ある程度英語を使って仕事ができるようになるためには、およそ 1,000 時間以上の学習時間が必要です。授業だけでは全く時間が足りません。これを何らかの形で補わなければならないのですが、その時に有効なのが CEAS です。いつでも、どこでも、無理のない形で学習できるのではないかと、活用を始めました。

“EGP”ではなく“ESP”

《日本の英語教育は EGP (English for General Purposes) が中心です。こちらは汎用性が高いものですが、現在、工学部と外国語教育研究機構が協力して CEAS 上で展開しているのは、ESP (English for Specific Purposes)。具体的な目的を特定した上での英語教育です。工学分野やビジネス関係を扱う商経分野で注目されています。その特徴は—》

現在、CEAS を用いて実践している ESP は、工学部の専門教育と連動させたものです。専門科目と英語の教師が、一つの教室で授業をシェアするというのは困難です。そこで、教室の中では専門教育を行い、関連する内容について CEAS を用いて、教室以外の自学自習の部分で英語と連動させています。学生は家に戻ったら、今度は英語の世界で、専門で学習した内容を確認するわけです。

これを課題学習として CEAS で回収するのですが、当然、きちんとできている場合と、分からないままになっている場合



が出てきます。学生は英語を通じたフィードバックを受けて次回の授業に臨むというシステムです。次回の授業では、専門の先生からもフィードバックをしてもらいます。一種のコラボレーションと考えてもいいでしょう。現在は工学部のプログラミングの授業で行っています。

理工系の英語だったら専門用語を覚えればいいのかと考えると、ESP は専門用語を勉強することだけが目的ではありません。その分野の視点や考え方を踏まえての学

習が ESP です。例えば、論文を扱うとすれば、「論文というのはこういうふう構成し、こういう表現を使うんですよ。では、実際に書いてみましょう」という教育を英語で行うのが ESP です。

教授法のシェアが可能に

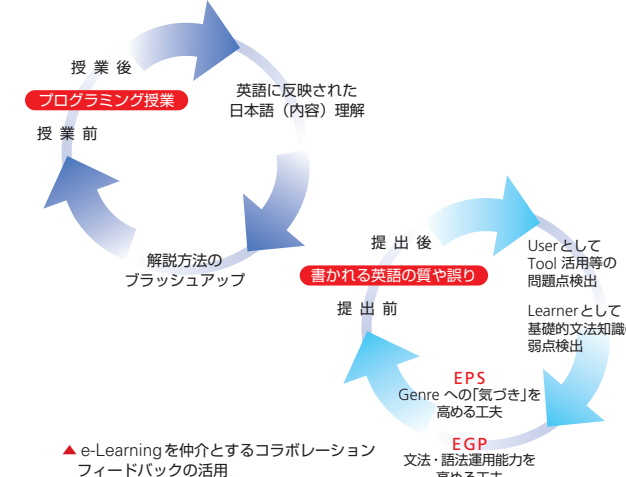
《専門科目と外国語科目のコラボレーションだけでなく、学生同士の学習コミュニティの場としても有効です。さらに、それぞれの先生の経験や考え方に根ざしていた教授法、教育方法を共有できるツールになり得ます。その可能性について—》



コンテンツづくりに時間がかかりすぎると、学習者へのフォローが後回しになってしまいがちです。そこで、凝ったコンテンツを作るよりも、日常的に大学で提供されている教材をコンテンツとした学習を、基本的と考えています。そのほうが授業との連携も取れるのではないのでしょうか。

昨年、CEAS を用いた学習で気づいたことなのですが、学生が学習に対する関心を持ち続けるだけでなく、CEAS 上の電子掲示板を用いて皆が作った英文をシェアし、そこでいろいろやりとりするなど、学習者同士のコミュニティもできているんですね。さらに、教師がそこにコメントすることで、授業の延長線上のコミュニケーションも可能になっています。掲示板上のコミュニティにとどまらず、授業前に学生たちが集まって自主的にディスカッションすることも見られました。どのように積極的に学習に目を向けさせるか、継続させるかというこれまで見失われがちだったところが、CEAS によって可能になるのではないかと思います。

さらに言えば、教授法をいかに洗練させていくか、といったことも可能になります。教授法の知識は、もちろんどの先生もお持ちですが、結局はそれぞれの先生方の職人技のような部分があって、これをシェアするというのはなかなか難しいことでした。そのため、どの先生も経験や勘に頼って教育を行ってきたところがあります。CEAS は教授法のシェアも可能にしますから、教員同士の情報交換の場としても活用されつつあります。



CEAS は自主的な学習の窓口

《今年 1 月に山本教授が視察に行ったアメリカでも、同じように教授法が課題として挙がっていたとのこと。教授法のシェアも目的としている CEAS は、アメリカでも面白い取り組みとの評価を受けられたそうですね》

CEAS のシステム開発を担当された工学部の冬木正彦先生と、アメリカへ e-Learning の視察に行ったのですが、そこでも同じことが問題となっていました。コンテンツを充実させても、なかなか学生がついてこないというのです。スタンフォード大学内にあるカーネギー財団の研究所を訪れた際に話題になったのは、コンテンツも確かに重要だが、授業運営方法、教授法をどうするかということが、もっと重要なのではないか、ということでした。CEAS のお話をさせてもらって、学生をいかに学習に向かわせるかという点で面白い取り組みとの評価を受けました。

e-Learning は、受け身的に学習するだけでは成果は上がりません。与えられたものから自分でいかに展開していくかが大切です。外国語学習で言えば、文字だけでなく、音声、視覚的なものなど、無料で手に入る教材はたくさんあります。インターネットはその宝庫です。CEAS を窓口として、自分の興味に従って学習を進めていってほしいですね。



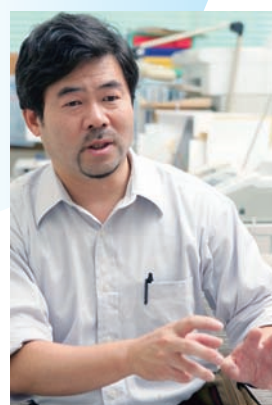
■研究最前線

超高密度化・大容量化されたハードディスクの実現へ

ナノテクによる NANOTECHNOLOGY  
高密度・垂直磁気記録

1テラ/平方インチのナノ磁性体配列・垂直磁化の発現に成功

●工学部 機械工学科 応用物理研究室  
新宮原 正三 教授

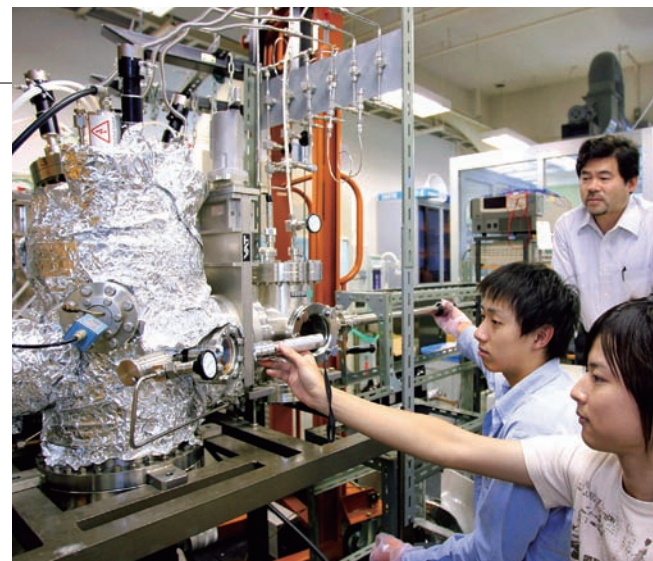


情報通信、医療、エレクトロニクスなどさまざまな分野での応用が期待されるナノテクノロジー。21世紀の最重要技術の一つとして、大きな注目を集めています。このナノテク技術の最前線で研究開発を進めている新宮原正三教授に取材し、超高密度化・大容量化された「夢のハードディスク」実現につながる研究にスポットを当てました。

21世紀の最重要技術「ナノテク」とは—

「ナノテク」とは「ナノテクノロジー」の略で、原子や分子の配列をナノスケール、つまり10億分の1メートルスケールの領域で自在に制御することで可能になる技術やモノづくりのことです。1ナノメートルは、例えば髪の毛の太さの約10万分の1、赤血球の千分の1という超微細な単位です。ナノの世界では、物質の特性や機能が変化すること、これまで不可能と思われていた現象が起こることが確認されています。これを利用して、望みの性質を持つ材料や機能を発現するデバイスを実現し、さまざまな産業に生かすことができます。

ナノテクによって実現されると考えられる具体例としては、アメリカのクリントン前大統領がかつて演説で述べたように、鉄鋼よりも10倍強く、しかも軽い素材の実現、国会図書館の情報を角砂糖大のメモリに収容すること、がんを極めて早期の段階で検出すること、なども挙げられます。ナノテクは、ITやバイオテクノロジー、素材、エレクトロニクスなどさまざまな産業の基盤にかかわるものであり、これらと融合することで、21世紀の最重要技術となります。わが国では「ライフサイエンス」「情報通信」「環境」と並んで、最も将来を嘱望される科学技術分野です。

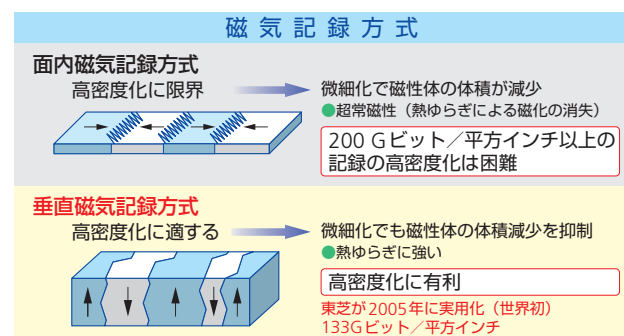


■強磁性のコバルト・ナノロッドの垂直配列を実現

—ナノテクを利用することで、IT分野のさらに大きな進歩が期待されています。

高画質の動画を小型の携帯機器に取り込むことも可能になりますが、そのためにはハードディスクの高密度化、大容量化が不可欠です。ハードディスクなどの磁気記録の方法は、磁石がたくさん並んでいるというイメージです。現在のハードディスクは磁石の向きが磁気記録と同じ面内に入っている面内磁気記録方式がとられています。これだと磁気記録ユニットを微細化すると磁性体の体積が減少し、熱ゆらぎによる磁化消失が生じるため、あまり高密度化することは不可能です。

高密度化には、磁石の向きがディスク面に対して垂直になっている垂直磁気記録方式への切り替えが求められます。そのほうが磁性体の体積の減少が抑制され、熱ゆらぎに強いからです。2005年に製品化されて以来、垂直磁気記録方式を採用し



ているハードディスクも増えてはいるのですが、次世代の1平方インチ当たり1テラ (テラは1兆) ビットといった超高密度化に対応する技術はまだ完成していません。

—どういった点に着目して研究を進められたのですか。

まず、陽極酸化技術に取り組みました。アルミニウムの陽極酸化によって得られる自己組織化ナノホール配列 (ポーラスアルミナ・ナノホール配列) を活用し、コバルト・ナノロッドを高密度で配列させました。ホールの直径と間隔の制御については、アルミニウム基板のエッチング時間と陽極酸化電圧で行っています。陽極酸化電圧を低くするとホール直径と間隔が小さくなり、ホール密度が増大します。

7ボルト以下で埋め込み形成した場合、強磁性体ナノ柱配列の面密度が1平方インチ当たり1テラ個になることを確認しました。ホールの深さも陽極酸化時間で調整できますし、直径も5~100ナノメートル程度の範囲で制御可能です。その後、形成したナノホールをもとに交流電解めっき法によってコバルト・ナノロッドを作製し、このロッドを基板に垂直な柱として並べることで、垂直方向の磁化の発現にも成功しました。

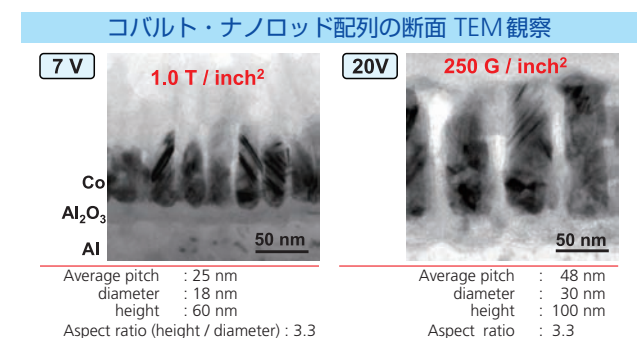
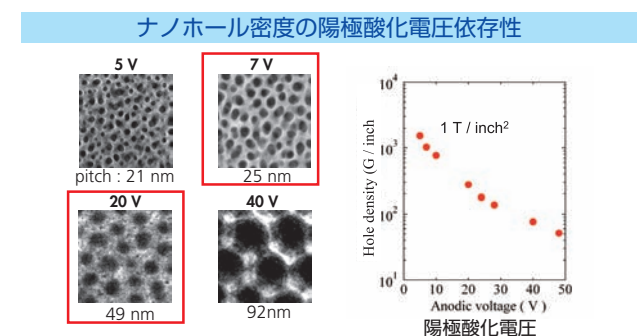
■磁性ナノロッド単結晶化による保磁力増加も視野に

—実用化に向けての大きな一歩ですね。

さらに残された課題は？

情報の記録・消去には保磁力が必要です。1平方インチ当たり1テラビットの記録密度を実現するには、垂直磁場下で8キロエルステッド以上の保磁力が必要とされています。ところが、コバルト・ナノロッドの場合、垂直磁場下でアスペクト比 (高さ/直径) 3.3で保磁力は2キロエルステッド。また、アスペクト比を3以上に高めたとしても、保磁力は横ばいになることも分かりました。加えて、個々のナノロッドの保磁力のばらつきも大きく、このままでは実用化には難点があります。

理論計算値によると、単結晶コバルトではアスペクト比3で保磁力が8キロエルステッド以上になりますから、保磁力の増加のためには、コバルト・ナノロッドの単結晶化に取り組まなければなりません。もっとも、コバルトではありませんが、単結晶化には成功していますし、コバルト・ナノロッドの単結晶化も、めどはついてます。



このほか、表面をいかに平坦にするか、電圧が低くなるほど配列が乱れてくるナノホールをいかにきちんと配列するか、ということも実用化に向けての課題です。ナノホールに不規則な配列部分があると、1平方インチ当たり1テラビットの記録密度にはなりません。規則的なホール形成が高密度化には不可欠です。これらは大学の研究だけでは難しいところもありますから、企業との連携も必要となってくるでしょうね。

■「研究マインド」を持たせるために

—研究指導に当たって力を入れていることは？

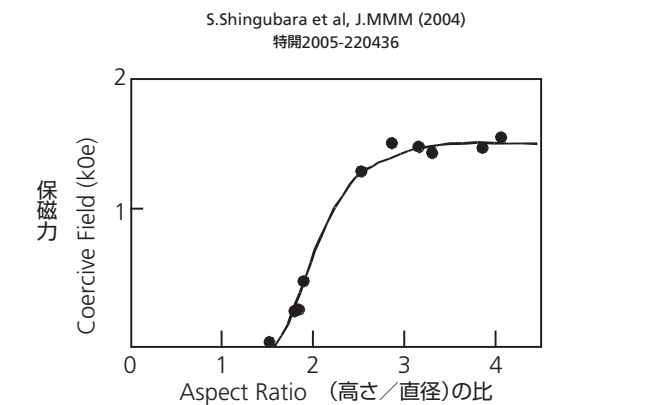
いかに「研究マインド」を持たせるか、ということです。大学の学生は授業を聴くのが精いっぱいかもしれませんが、大学院に進学する人は今後の研究の担い手でもあるわけですから、社会に通用する研究への取り組みを十分に教育し、きちんとした成果を出させてやりたい。そのためには本人が自覚を持って研究に取り組まなければなりません。やる気を出すこと、研究に興味を持つこと、これが研究マインドの基本です。この研究マインドを学生に持たせるよう、一生懸命工夫をしているつもりです。

—今まで不可能だったものが可能になるという点では、難しくても面白い世界ですから、学生も興味を持つのではないのでしょうか。

ただ、ある程度研究を進めていかないと結果が分からない世界ですから、モチベーションが重要です。さらに、自分で自分の実験の組み立てができるということも大事です。これは学部卒業研究を1年ぐらいして、やっと分かってくることなんです。

あとは、さまざまな学会に出席して人の話をよく聴くこと、そして自分が発表する経験を持つことです。たとえ不完全でも人前で話す経験を持たせる、いわば外部への武者修行ですね。私の研究室では、ほぼ全員に修士課程1年のうちに発表する経験をさせるようにしています。質問されると十分に答えられなかったとか、人がどのように説明するかを聴くなどの経験を重ねながら、徐々に研究マインドが育ってきているように思います。

■コバルト・ナノロッドの保磁力のアスペクト比依存性





関西大学 創立120周年  
記念式典・祝賀会を開催



学の実化の  
歴史と伝統を継承

社会に役立つ人材を育成、世界に貢献を!

関西大学は11月4日、創立120年という節目の日を迎え、千里山キャンパスで記念式典を挙行了しました。120周年を記念して数々の事業や行事が繰り広げられてきましたが、この日は簡素にして厳粛な式典となりました。また式典終了後、2月に竣工した総合学生会館「メディアパーク 凜風館」で記念祝賀会が開催されました。

4日午後2時からBIGホール100で始まった式典には、各界から多くの来賓の方々約1,000人が出席して創立120周年を祝いました。



まず、上原洋允常務理事が「120周年を第一歩として、これから150周年、200周年と伝統を重ね、着実な歩みを続けていきたい」と開式の辞を述べました。

学歌斉唱のあと、森本靖一郎理事長の力強い式辞がありました。

「本学は長き歴史の中で、教育と研究への畏敬の念を抱きつつ、学歌に謳う『学の実化』という学是により、一貫して実学を重んじてきました。そして、人を愛し、慈しみ、人をしてより人たらしめんと、社会に役立つ人材の育成を片時も忘れることはありませんでした。この自覚が本学を支える基盤であり、ここに関西大学の確たる存在意義があると信じます」

続いて、河田梯一学長があいさつ。商都・大阪が元禄時代以降、学問の府であったことに触れ、「大阪の知的な歴史と伝統を継承して、1886年11月4日、関西大学は近代的な法律の整備、それを運用する法曹人の養成を目指して、西日本で最初の法律学校として創立されたのです」と、大阪の歴史の中に関西大学の創設を位置づけました。その建学の精神である「学の実化」とは、学理学問と実際実践との調和統一をはかり、社会に有用な品格ある人材を生み出すことだと語り、120年の歴史と伝統の継承を訴えました。そして「時代の要請に応じた良質の



教育を行い、優れた研究成果をあげ、地域、国家、世界に貢献する関西大学になっていくため努力すること」を誓いました。

来賓紹介のあと、池坊保子・文部科学副大臣、冬柴鐵三・国土交通大臣(校友)、安西祐一郎・社団法人日本私立大学連盟会長、太田房江・大阪府知事が、祝辞を述べました。

特別公演として天王寺楽所雅亮会による天王寺舞楽「萬歳舞」の演舞・演奏があり、120周年を祝う式典は盛会のうちに終了しました。

会場を凜風館2階のダイニングフロアに移して行われた祝賀会では、リチャード・S・マイヤーズ・ウェブスター大学学長に対する名誉博士号の贈呈式がありました。

次いで、野村明雄・大阪商工会議所会頭の発声による乾杯で祝宴が始まり、120年という佳節を祝しました。

創立120周年記念ウォークを実施  
創立の地を偲び、由縁の地を巡る

創立120周年を記念する行事として、関西大学の原点である大阪市西区京町堀から千里山キャンパスまでの約15kmの道のりを歩くイベントを開催しました。10月15日午前8時に、うつぼ公園に集まった校友、学生、教職員ら約220人の参加者は、秋晴れの下、まず「関西法律学校発祥の地」の石碑が建つ願宗寺史跡、そのあと興正寺史跡を巡り、天六キャンパスを経て、ゴール地点である千里山キャンパスを目指しました。



■創立120周年記念事業の一環行事  
法学部創立120周年記念事業

「法テラス」に関するシンポジウムなどを開催

関西法律学校として設立された関西大学の120年は、法学部の歴史と重なります。法学部では、次のような記念事業を行っています。

「司法制度改革と法曹の新たな役割像」と題する日本司法支援センター〈法テラス〉に関するシンポジウムを、11月18日にBIGホール100において、法科大学院と共催。第1部では「裁判所から見た司法制度改革」をテーマに、10月末に最高裁判所判事を定年退官した滝井繁男氏が基調講演。第2部では「動き出した法テラス——その課題を探る——」をテーマに、パネルディスカッションを実施。パネリストは大場亮太郎・日本司法支援センター事務局次長、佐伯照道・日本司法支援センター大阪事務所長、小寺一矢・大阪弁護士会会長、佐柄木俊郎・国際基督教大学客員教授、久保井一匡・元日弁連会長。

このほか、「21世紀の東アジアと日本」と題する法学部・法学研究所共催コロキウムを12月2日、尚文館マルチメディアAV大教室で開催。また、来年3月に記念論文集が刊行されます。

創立時の『関西法律学校規則』  
山野博史・法学部教授が発掘、寄贈



法学部の山野博史教授が、今年3月、京都市内の古書店の通信販売目録で『関西法律学校規則』の入手に成功しました。1886(明治19)年10月、開校前に刊行されており、表紙に「関西法律学校之印」と四角い朱印が押してあり、創立時の最初の公式刊行物と思われる。

四六判16ページで、「関西法律学校設立ノ主旨」「関西法律学校規則」「関西法律学校々員規則」「講師ならびに名誉校員氏名一覧」「事務員氏名一覧」がその全容です。

山野教授は「簡潔でありながら委曲をつくした名文章からなる『関西法律学校総合案内』として、創立者の烈烈たる意気を晴朗に伝えてあまりある。創立当時、初の公刊物たる学校規則の現物を自ら所蔵する大学は見つけにくい」と語っています。

折しも創立120周年の佳節に、3世紀にまたがる歳月を経て里帰りを果たし、本学に寄贈されたことは喜ばしいかぎりです。

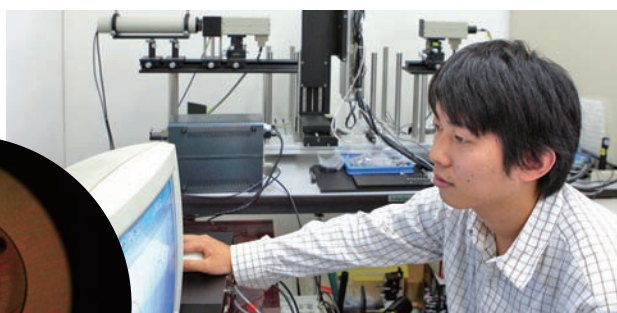


## 光弾性定数測定装置を開発 液晶ディスプレイの 高精細化を推進

光学部品の高度な偏光管理が可能に——

◎工学部 物性物理工学研究室 田實 佳郎 教授

携帯電話やパソコンの液晶ディスプレイは、日本が得意とするところで、フィルムなどの部材も日本企業の独壇場となっています。より大画面、高精細化が求められており、それを高度に実現するためには、解決しなければならない技術的課題があります。工学部物性物理工学研究室の田實佳郎教授は、液晶ディスプレイの高精細化への道を開く、薄膜フィルム用の「光弾性定数測定装置」の開発に当たっています。(株)ユニオプト、(株)井元製作所と共同研究を進めている最先端技術について聞きました。



——光弾性定数測定装置の「光弾性」とは？

物質に光が入射する時に2つの屈折光が現れる現象を「複屈折」といいます。例えば、方解石を通して文字を見ると二重に見える現象が複屈折です。また、力や歪みが物質に加わって屈折率が変化する現象を「光弾性」といいます。複屈折や光弾性があると、二重に見えたり、色がぼやけてしまいます。

——どういったところで「光弾性定数測定装置」が必要とされているのですか。

液晶ディスプレイの表示には「偏光」と呼ばれる光学特性が利用されていて、高精細化を実現するためには、少しの「偏光の乱れ」も許されません。このため、現在では使用される光学素子フィルムの高度な偏光管理が必要になっています。特に、偏光の乱れに与える影響がわずかで従来は問題視されなかったフィルム材料の「光弾性現象」が注目されています。材料が力を受けたり変形したりして偏光を乱す光弾性現象を正確に制御しなければ、液晶ディスプレイの高精細化を達成することはできません。

——今までの測定装置との違いは？

従来の測定装置では、微小な変形で誘起される「微小な偏光の乱れ」が測定できず、フィルムが破れるぐらいの大きな力を加え、大きな偏光の乱れを作り、評価していました。本来、光弾性定数とは物質定数で、分子の構造などが決まれば一つに決

まる量ですが、このような測定法では大変形の影響が強く、新しい低光弾性フィルムを分子構造から設計するためのデータが得られなかったのです。

私たちは、均一微小歪みを試料に与える機械系を設計開発し、これによりフィルム試料に「微小な偏光の乱れ」を起こし、「光ヘテロダイナ法」という方法で、その微小な乱れの方角と大きさを同時に測ることを可能にする装置(光弾性定数測定装置)を開発しました。

——現段階での成果と今後の課題は？

今回開発したシステムでは、従来の千分の1、あるいは、1万分の1以下の力や歪みで測定が可能です。ここで評価した光弾性定数はより物質定数に近く、微小な光弾性定数を持った材料の開発指針が得られます。さらに、この装置を使い評価することで、光学部品の高度な偏光管理が可能となります。

将来的には、分子1個1個がどのような性質を持っているか、どういった並びが良いのかを判定して、この材料でこういうフィルムが作れるということを示すことができると考えています。

私は応用物理を専門にしてきましたが、研究室の電気工学科の卒業研究生や大学院生は非常に優秀なので、化学系の会社と組んで進めている研究を、システムに仕上げるのに大きな力になっています。すなわち、私の研究室の中では絶えず異分野の共同研究が行われているのです。今後はより素晴らしい展開を、研究室が一丸となって進めていきます。期待してください。

日本初

## カレッジリンク型 シニア住宅 創設記念シンポジウム開催

関西大学文学部は、大学の高等教育機能を組み込んだ本格的な「カレッジリンク型シニア住宅」の入居者を対象に、2008年度から各種の教育プログラムの提供を開始します。その創設を記念するシンポジウムが9月11日、千里山キャンパス BIGホール100で開かれました。



大学と住宅運営者との協力で展開される「カレッジリンク型シニア住宅」事業は、すでにアメリカで始まっていますが、日本で本格的に実施されるのは初めてです。関西大学文学部は、(財)社会開発研究センターと連携し、(株)アンクラージュが建設中のシニア住宅「アンクラージュ御影」(神戸市灘区)の入居者を対象に、多様な教育プログラムを提供します。

創設記念シンポジウムでは、最初に森本靖一郎理事長が「世界一の長寿国にふさわしい高齢者の生涯教育の環境を整えなければならない。この日本初の事業をぜひやり遂げたい」とあいさつ。加勢田博・副学長\*が「人生の最初の3分の1は学校教育の時代。次の3分の1は企業で働き、残りの3分の1はカレッジリンク型で、大学教育を利用して自分の価値を高めていただきたい」と述べました。

続いて、多摩大学名誉学長・(財)社会開発研究センター前理事長の野田一夫氏による「高齢社会におけるカレッジリンクの社会的意義と大学の新たな役割」と題する基調講演がありました。

「18歳人口が減少し、教える意欲に欠けた大学が増えた今、明治以来の大学教育が根本的に覆ろうとしている。大学は時代の要請に応じてさまざまな役割を果たすべきであり、カレッジリンクはその新しい役割の一つ。大学は18歳の若者だけでなく、万人を相手にすべきだ。高齢者から大きな需要があり、文学部がそれに最もよく応えることができる」と



述べて、大学の固定観念を払拭する絶好の機会となることを強調しました。

パネルディスカッションでは、芝井敬司・文学部長\*が司会を務め、村田裕之・(財)社会開発研究センター理事長、小中村政廣・(株)アンクラージュ代表取締役社長、奥純・文学部教学主任\*がパネリストとなり、「カレッジリンクが社会を変える」というテーマで活発な意見の交換がありました。

\*役職は9月11日現在のもの

### ■主な教育プログラム

#### 1. オンキャンパス・プログラム

- ◇文学部または大学院文学研究科の科目等履修生または聴講生としての受け入れ
- ◇文学部または大学院文学研究科の社会人学生としての受け入れ
- ◇各種の公開講座、講演会など大学主催行事への参加

#### 2. オンコミュニティ・プログラム

アンクラージュ御影での講座等の実施

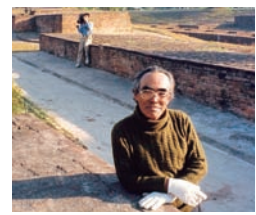
#### 3. プレコース

2007年度に千里山キャンパスで入居予定者対象に10程度の講座を実施



明日香村で  
「網干先生を偲ぶ会」高松塚古墳壁画発見、祇園精舎遺跡発掘  
後進育成にも尽力

生涯をかけて古代史の研究と教育に情熱を傾けた網干善教名誉教授(明日香村名誉村民)を偲ぶ会が、10月16日に明日香村中央公民館で開かれました。



7月29日に亡くなられた網干名誉教授は、関西大学助教授だった1972年、高松塚古墳発掘の現場責任者となり、「飛鳥美人」や四神図などの極彩色壁画を発見し、考古学ブームを巻き起こしました。

高松塚古墳以外にもキトラ古墳の学術調査団顧問を務めるなど、飛鳥地方の古墳調査を続ける一方、86年からは関西大学の調査隊を率い、インド政府と共同で祇園精舎遺



跡の発掘に当たりました。関西大学の博物館長や飛鳥文化研究所長を歴任し、後進の育成にも尽力されました。

「網干先生を偲ぶ会」では、生前の写真や高松塚古墳発掘の様子の映像が放映され、森本靖一郎理事長らがあいさつ。参会者約400人が最後の別れを惜しまました。

なお、網干名誉教授には7月29日付で従五位瑞宝中綬章が追贈されました。

誠之館1号館跡地を緑の広場に  
夜はライトアップイルミネーション

関西大学の千里山キャンパスに、学生が自由に集い、憩うことができる開放感あふれるスペースが誕生しました。

関西大学生協同組合が総合学生会館「メディアパーク凜風館」に移転したことに伴い、誠之館1号館を解体。その跡地に、青空と緑が広がる空間を創出するため、芝生広場やベンチを整備し、「悠久の庭」と名付けました。緑豊かなキャンパスの中心にふさわしいアメニティーが整いました。

さらに、芝生広場を囲む23本のケヤキを約15,000個のLED(発光ダイオード)によるイルミネーションで飾り、輝く広場を演出します。11月1日に点灯式を挙げる。原則として大学休業日以外の夜間に毎日ライトアップする予定で、地域住民の方々にも親しんでいただける空間として開放します。

「教務センター」が業務開始  
学生・教員へのサポートを充実

千里山キャンパスの第2学舎1号館1階に「教務センター」が設置され、9月21日から業務を開始しています。今まで学部事務室・大学院事務室が行ってきた修学上必要な諸手続きに関するサービス(教務事務)と教員に必要な教務に関するサービスは、教務センターでまとめて行われるようになりました。

1カ所に対応することにより、事務スタッフのパワーを集中させて、より一層の教育的効果やサービスの向上に特化しようというのが狙いです。教務センターは相談業務の充実も図っています。

また、授業に直接関連するサポートを行う「授業支援ステーション」が、各学舎内に配置されています。